

大島 清・麻生武志・富永敏朗

松林清明・林 基治

1976年3月27日第1回

日本比較内分泌学会(岐阜市)

- 4) 霊長類の眼底に関する研究—真猿類および原猿類種類の通常、特殊撮影による眼底所見—

福井正信・後藤 俊二・古川敏紀

広瀬正美・松浦由美子・杉浦邦紀

石井俊雄・大永 博資

第20回プリマーテス研究会(1976)

- 5) 霊長類の眼底に関する研究—各種真猿類および原猿類の蛍光眼底撮影について—

福井正信・後藤 俊二・古川敏紀

広瀬正美・松浦由美子・土屋明彦

杉浦邦紀

第81回日本獣医学会(1976)

- 6) 入荷時および検疫終了時におけるアカゲザルの血液性状の比較

三輪宣勝・松林伸子・才田春夫

第20回プリマーテス研究会(1976)

幸島野外観察施設

河合雅雄(施設長・兼), 近藤

四郎(施設長事務取扱・兼),

森 明雄

幸島をめぐる観光開発や観光客の増大によるフィールド維持の困難さは持続している。この問題は基本的には、国による管理体制を作ることが最も望ましい解決法であろう。

51年2月、幸島と本土の間の海域に砂が堆積し、干潮時には陸続きになる現象が起った。このため観光客は自由に渡島でき、またサルが観光客の餌にひかれて本土に渡る可能性がでてきており、その管理に大きな努力を注いでいる。

幸島にある京都大学理学研究協会の建物の敷地に対する串間市と財団法人理学研究協会の無償貸借契約が51年2月14日で切れたが、さらに10年間契約を延長することになった。

なお、50年8月より河合施設長の海外出張に伴い、近藤四郎が施設長事務取扱を勤めた。

《群れの状況》

幸島に生息するニホンザルは107頭(51年3月現在)である。リーダーの地位、群れの社会構造は比較的安定している。50年度の出産は、オス1頭にとどまった。これは49年の出産が22頭と多かったためと考えられる。死亡個体は1歳オス2頭、1歳メス3頭、4歳オス1頭で

ある。島外に移出した個体は10歳オス1頭が確認されている。島内への移入は、オトナのオス2頭(推定年齢約15歳、11歳)が確認されている。このうち1頭は非常に短期間のうちに群れの中に入り、安定した地位を獲得した。

研究概容

- 1) 幸島のサルの生態学的社会学的研究

森 明雄・河合 雅雄・三戸サツエ

山口直嗣・冠地富士男

前年度からの継続で、ポピュレーション動態に関する諸資料を収集している。毎月1回ほぼ全個体の体重測定を行っている。個体の生長と関連して、今年度特に注目した点は、発情開始の年齢を調べることで、各個体の発情の状況を、特に若い個体(3~8歳のメス)について調べた。社会学的研究については、通年の変化や、個々のトピックについて調べている。例えば、ここ数年オトナメスの死亡が多かったので、母親をなくしたコドモの順位を調べることににより、メスの順位決定のプロセスの解明を試みたことなどである。幸島のサルは地上で寝る場合が多いことがわかっているため、Sleeping groupを調べるよう試みたが、まだ十分には成功していない。

- 2) 内部寄生虫に関する研究

堀井洋一郎(宮崎大学)・森 明雄

内部寄生虫卵の季節的变化を、毎月1回、個体毎に採糞することにより、定量的に調べている。本年度は、特に駆虫に重点をおいた。野外での駆虫は、投薬が非常に困難であったが、今回はじめてサイアベンダゾールを用いて、定量的投薬に成功し、投薬の効果を量的に把握した。

- 3) 高崎山に生息するニホンザルのアカンボウ(0歳)の死亡数と死亡要因の推定

森 明雄

前年度からの継続で、高崎山A群、B群の識別したオトナメスのアカンボウの生死を毎月1回確認し、死亡時期を調べた。

なお、50年度に本施設を利用した共同利用研究者は、町田昌昭(国立科学博物館)、荒木潤(帝京大)、堀井洋一郎(宮崎大)である。その他長期滞在した研究者は、山極寿一(京大・理)、上野進(京大・理)、S. Green, S. Zoloth(Rockefeller Univ.)である。本年度に、本施設を訪問あるいは利用した研究者は延べ392人である。

論 文

- 1) Mori, A. (1975): Signals found in the grooming interactions of wild Japanese monkeys of the Koshima troop. *Primates*, 16(2): 107-140.
2) Mori, A. (1975): Intratroup spacing mechanism of the wild Japanese monkeys of the Koshima

troop. In *Contemporary Primatology*, S. Kondo, M. Kawai and A. Ehara (eds.), Karger, Basel. pp. 423-427

学 会 発 表

- 1) 幸島に生息するニホンザルの排泄寄生線虫卵の季節的変動ならびに駆虫試験について

堀井洋一郎・森 明雄

第20回プリマテス研究会(1967)

ニホンザル研究林

ニホンザル研究林施設設置の準備段階として、特別事業(下北)によって下記の調査研究および折衝が行われた。

1. 長野営林局と話し合い、上信越地方における研究林予定地について相互の了解に達した。

2. 下北半島: 1) 主として食痕、糞内容と直接観察から、年間の食物の季節変化と採食行動の資料を集積記録した(和田久他との共同研究2年計画の第1年)。2) これまで知られた約60地点の泊り場について林分構造、植生のなかでの位置・地形的特性の調査を進めるため、初年度として調査記録の検討をおこなった(森治他との共同研究)。3) ブナ・ヒバ林の択伐的施業と更新の過程を永久クオドラート(40×40 m²)を設けて追跡調査した。択伐天然更新の造林技術的解析と、それにともなっておこる森林植生のサルの生息環境としての変化の予測を行なうことを目的としている。4) 冬期12月~3月(63日間)にわたって、M群の遊動の連続追跡をおこなった。積雪期の土地利用、遊動の性質、遊動生活への気象積雪状態の影響、冬期の泊り場のえらばれ方など遊動と環境構造、遊動と群れ社会の関係を考える上で、基本的なデータがえられた。なお、これまでの調査で、M群については、森林の林分構造と過去の施業のあり方が、遊動ルートと泊り場の選択に与える影響をある程度まで明らかにした。これは、今後、ニホンザル個体群の生活維持と森林施業のあるべき姿、とを考えると重要な知見である。

3. 屋久島: 1) 集中調査(第3次)、1975年7月16~8月15日(31日)にわたり、12名(増井憲一、福田史夫、田中晋、小倉進一、斉藤、桜井道夫、菅牧子、渡辺邦夫、J. Burton、丸橋珠樹、足沢貞成、東滋)による共同調査をおこなった。目的としたのは、研究林予定地を中心とする地域個体群の現状と動態を、継続的につかむことであった。(a)永田一瀬切間の西部林道ぞい、国割岳斜面の国有林(下屋久営林署1~6林班: 研究林予定地)、(b)それに隣接する民有林、(c)国割岳西北稜(上屋久営林署)を対象に調査した。全域について群れの分布、群れ

の大きさをおさえた。A、Bの4群については、性・年齢構成・遊動・群間関係・遊動時のグルーピングなどについてくわしい調査がなされた。

以上は、増井憲一他との共同利用研究計画と研究林特別事業とを中心にして、企画実行された。2) 丸橋珠樹がK、O群について、6月、10月、12月、2~3月の通年の生態学的調査をおこない、自然群のhabituationのもとに、遊動と土地利用の季節変化の研究をおこなった。

報 告 そ の 他

足 沢 貞 成

- 1) 畑に被害をおよぼすサルの対策について

一青森県下北群脇野沢村九艘泊の群れを例に—
〔雑誌にほんざる I, 1974〕

- 2) 北限にて思う〔モンキー No. 143 1975〕

- 3) 下北のニホンザル

一冬の遊動生活と森林の変貌—(I)
〔モンキー No. 144 1975〕

- 4) 下北のニホンザル

一冬の遊動生活と森林の変貌—(II)
〔モンキー No. 145 1975〕

大学院学生

昭和50年度における京都大学大学院理学研究科動物学専攻霊長類学分科の学生、指導教官および研究テーマはつぎのとおりである。

氏名	学年	指導教官	研究テーマ
佐藤 俊	D 2	河合雅雄	ケニア北部に住むレンディーレ族の遊牧生活に関する研究
渡辺邦夫	D 2	川村俊蔵	シシバナザルの社会行動
B・S・グレワル	D 1	河合雅雄	ニホンザルにおける活動様式と社会関係の量的研究
栗石邦義	D 1	川村俊蔵	モズの社会行動
菅原和孝	D 1	河合雅雄	ニホンザル自群然における青年期オスの成長にともなう社会関係の変遷に関する社会学的研究
J・ブルトン	D 1	川村俊蔵	ニホンザルの Clustering に関する比較行動学的研究
松村道一	D 1	久保田競	霊長類の随意運動の制御におけるシナプス機構の分析
十川和博	M 2	高橋健治	霊長類の組織タンパク質の分解機作の研究
浜田生馬	M 2	久保田競	霊長類行動発現機構の神経生理学的研究